

<大阪市立大学 事例報告>

「O C U指標導入による学修成果の 質保証・向上」 —学修成果評価活動を中心に

西垣順子(大学教育研究センター、准教授)

佐々木洋子(学修支援推進室、特任助教)

OCU指標の仕組みと学修支援推進室の活動の詳細は、チラシをご覧ください。

- ・ OCU指標Tips
- ・ ラーニングセンターのチラシ

大阪市立大学教育改善・FD宣言（2011年3月）

- 「質の高い教育活動を維持し、教育力の一層の向上に資するための、教員団を中心とする構成員の自律的で組織的な改善の活動」と定義。専門家モデルではなく、同僚性を基盤にする
- FDの主体は「各教員はもとより、大学教育研究センター・教育推進本部・大学経営層・大学職員、さらには教育対象であり自律的学習主体でもある学生を含む大学構成員」
- 内部質保証の位置づけ
「大阪市立大学は、また、この自己点検活動に基づく恒常的な教育向上の取組みを基盤としつつ、それらの取組みが本学の教育活動全体の質の向上に真に結びつくものとなるよう、部局を超えた全学的な教育改善・支援を、効果的かつ組織的に行う」

大阪市立大学 教育評価方針

立付：

全学の教育評価方針と全学・学位プログラムごとの教育評価計画

概略：

- ・ DPに掲げる学修成果の達成に関連する状況について、
直接評価と間接評価で評価
- ・ DP, CP, APの見直し

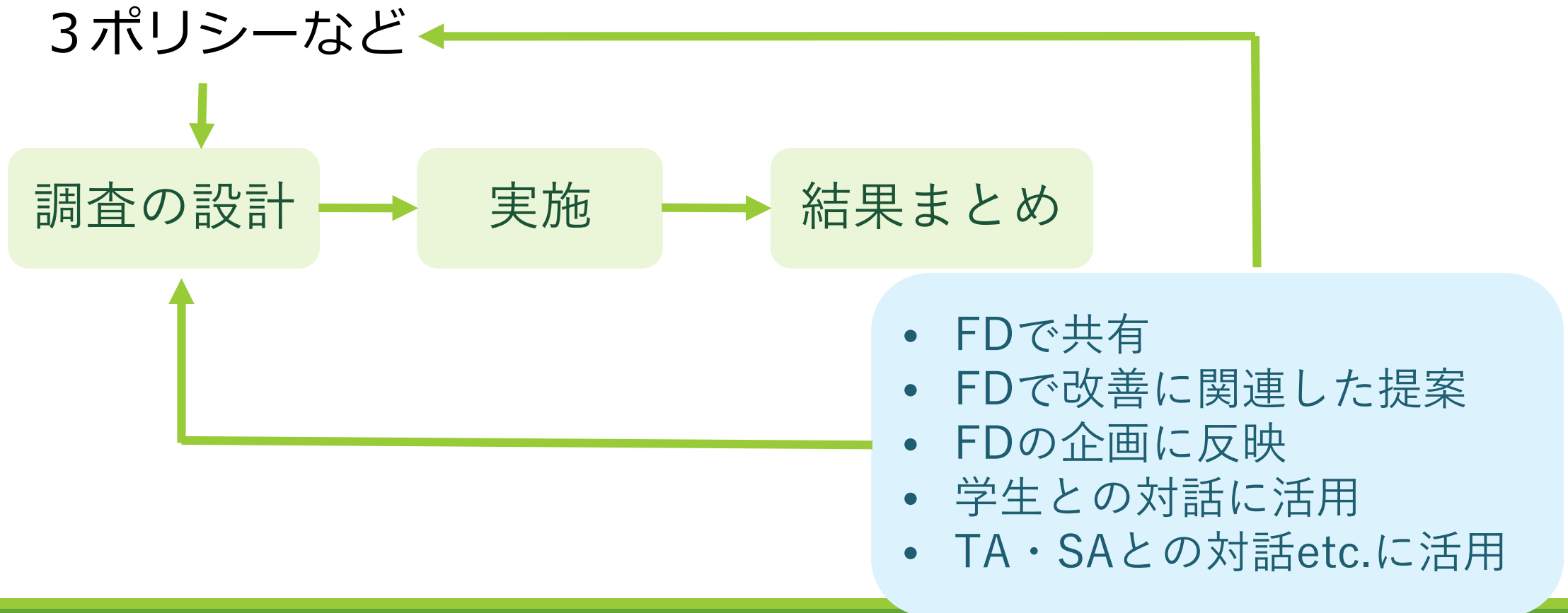
直接評価：授業の成績評価、OCU指標、GPAなど

間接評価…学生調査（学士課程1年生・上級生・大学院生）、
卒業生・修了生調査、教員の意識調査、授業アンケート

履修支援ツールとしてのOCU指標

- 各科目のGPだけでは見えない多様な学修成果を視覚化
- 所属する学部での学修や希望するキャリアによって、理想となる6角形は多様
- 学生は現在の学修成果を知り、将来のキャリアデザインを考えつつ、次に履修すべき科目を考える

間接評価：仮説生成・対話支援・FD支援 ツールとしての 学生調査、教員調査etc.



教員調査（2011年と2017年）結果と活用

1. 自律的なFD参加と多様な形でのFDの実施
 - 各部局のFDへの参加経験（78%→84%）
 - 全学FDへの参加経験 約5割
2. 学習成果の把握（医学研究科以外の結果）
 - 小テスト、ミニレポート、中間試験（7割前後）
 - 期末試験や期末レポート（58%→64%に上昇）
 - 授業評価アンケート（29%→16%）
3. 見えてきた課題：LMS導入やWiFi環境充実の必要性和可能性
 - 教員の管理運営活動の従事時間の増加
 - e-Learning実施経験は16%だが、実施希望は39%→限られた時間で教育上の工夫ができる環境整備が必要、かつ効果見込み

学士課程上級生調査(2016年実施)結果 (一部)と 追加調査(2018年～)

女子学生と男子学生で異なる学習ニーズが存在？

表1 性別(男女)×所属(文系、理工、医療、生活)×学年(2・3・4年)の人数分布表

	2年生				3年生				4年生			
	文系	理工	医療	生活	文系	理工	医療	生活	文系	理工	医療	生活
男性	83	186	73	16	119	231	48	14	88	257	48	11
女性	94	65	43	62	129	45	35	87	108	54	32	73

★ 質問項目

(1) 卒業後の進路希望：次から多肢選択

「民間企業」「公務員」「学校教員」「自営業」「NPO等」「本学大学院」「他大学大学院」
「海外の大学・大学院」「大学・大学院以外の留学」「その他」「特になし」

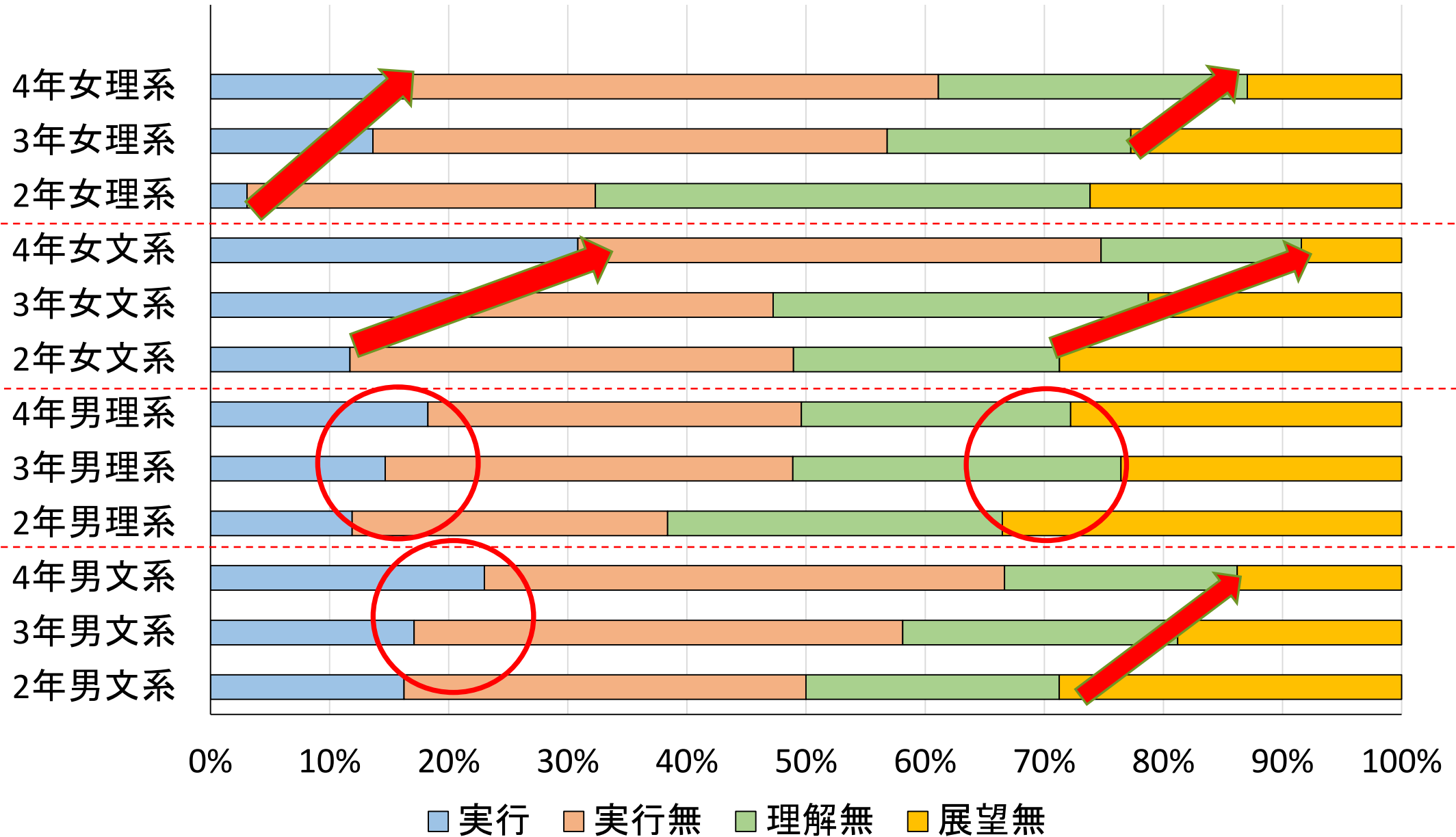
(2) 将来展望：次の4項目から1つ選択

- ① 将来の見通しを持っている＋何をすべきかわかっている＋実行している
- ② 将来の見通しを持っている＋何をすべきか分かっている＋実行していない
- ③ 将来の見通しを持っている＋何をすべきかわからない
- ④ 将来の見通しを持っていない

(3) 卒業までに経験したいこと：後述の13項目について「そう思う」から「そう思わない」の4件法

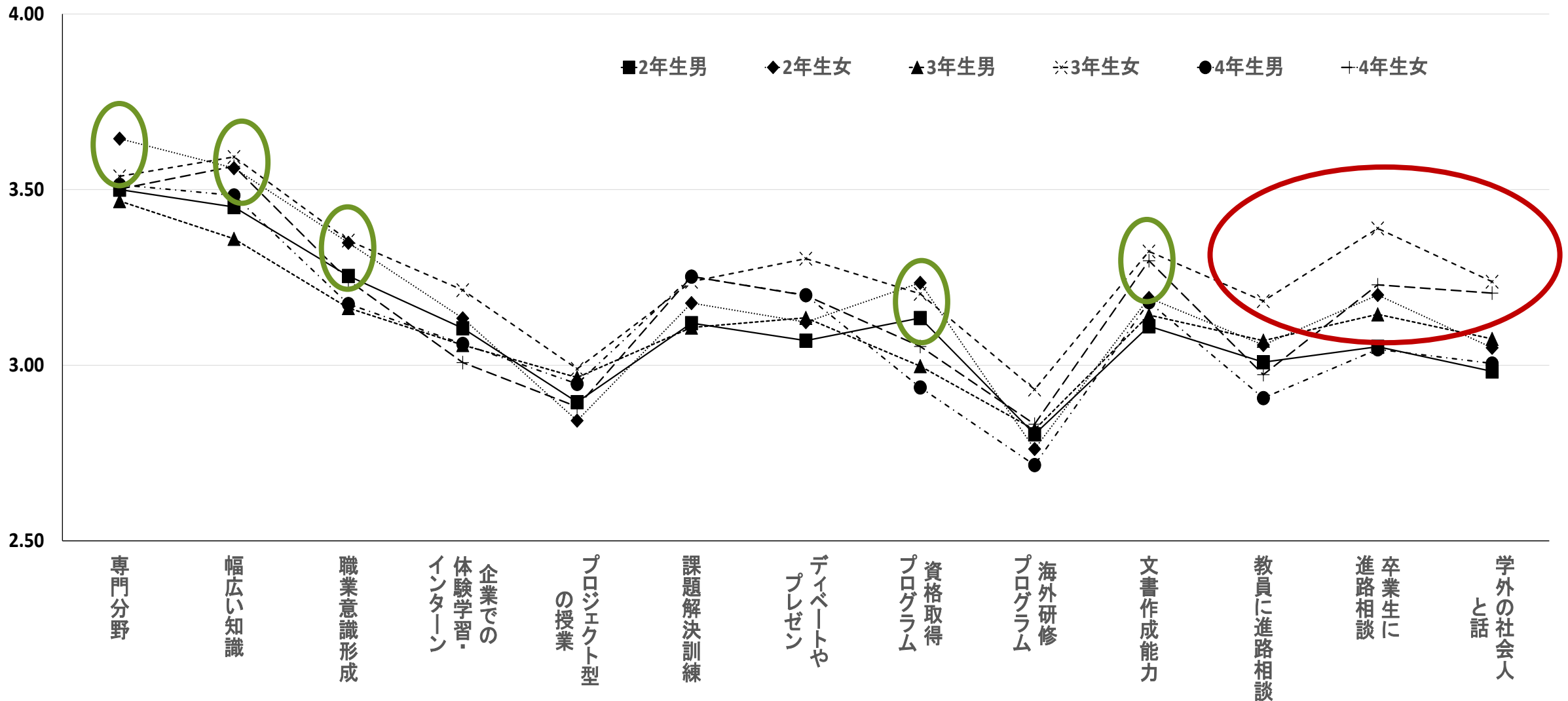
(4) 現在の学習行動：後述の15項目について「頻繁にした」から「全くしなかった」の4件法

文系・理工系×男女別の将来展望回答

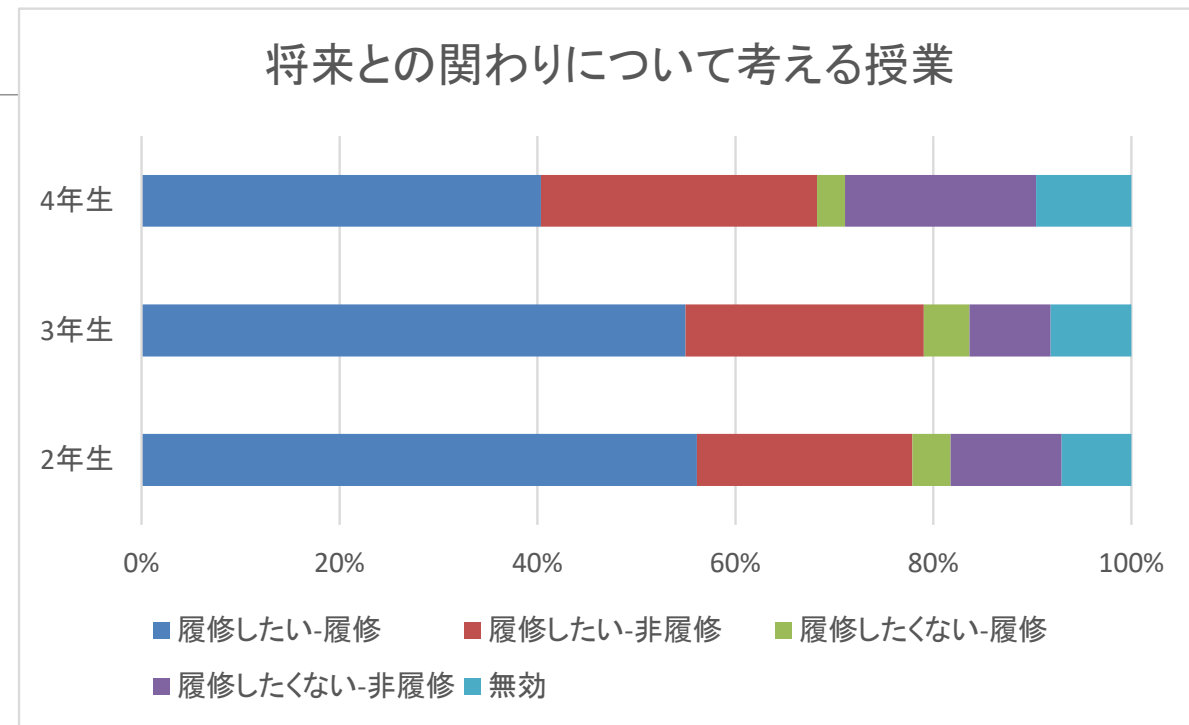
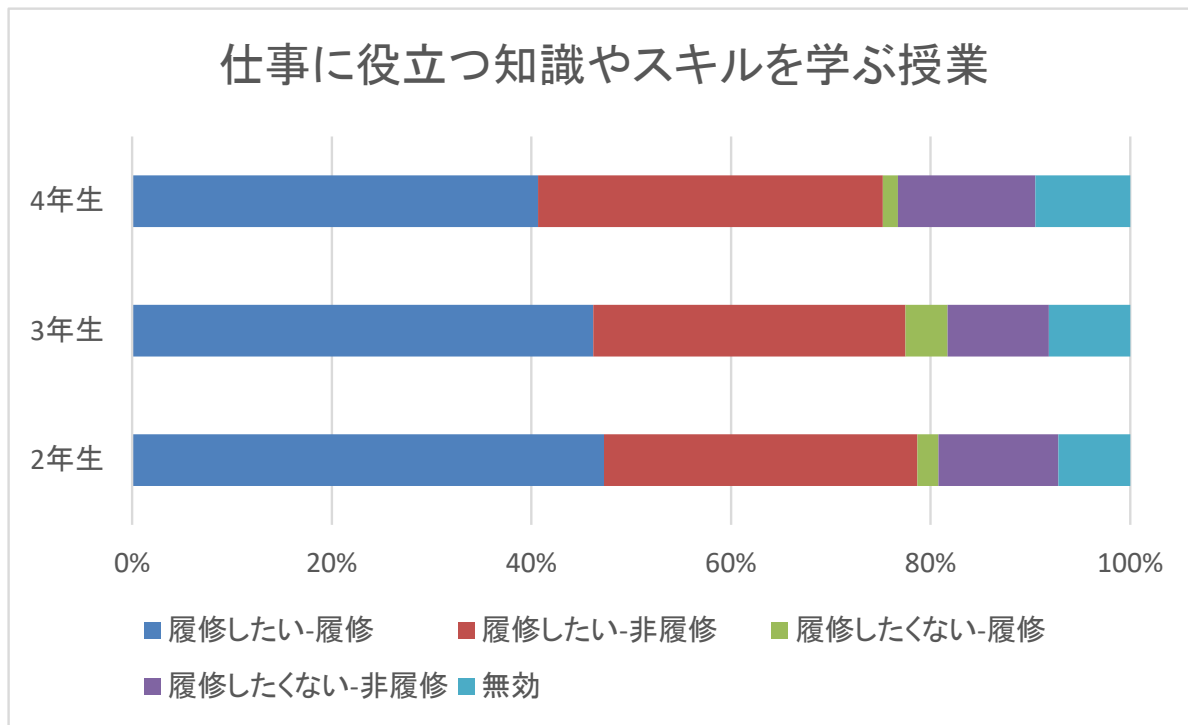


男女別の卒業までに経験したいこと

- 女子は、知識技能や資格などの学修成果を強く望み、卒業生など学外者との対話を希望



学年別・授業履修(希望と実際)

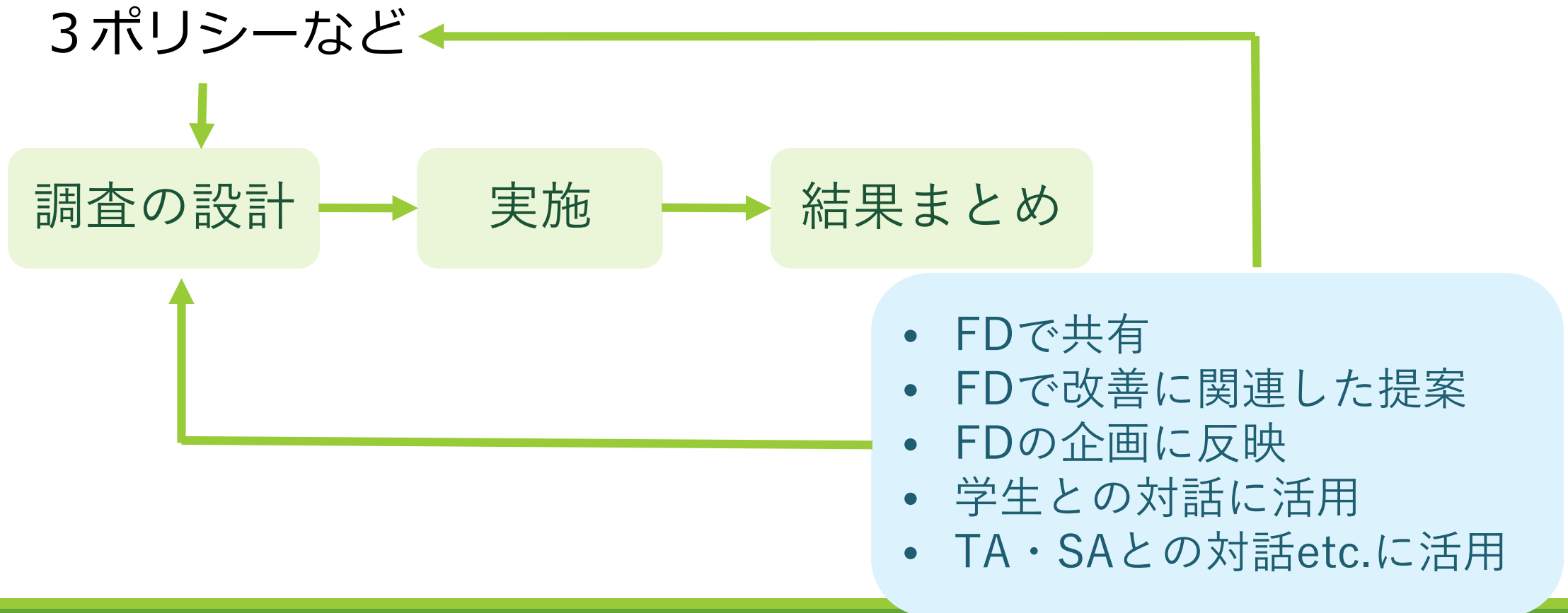


- 仕事や将来について考えたり学んだりしたいという希望は2年生から多い
- 「将来との関わりについて考える授業」は各学部で比較的多く展開されているはずだが…（周知不足もあるのか？）

追加調査：理工系女子学生へのインタビュー

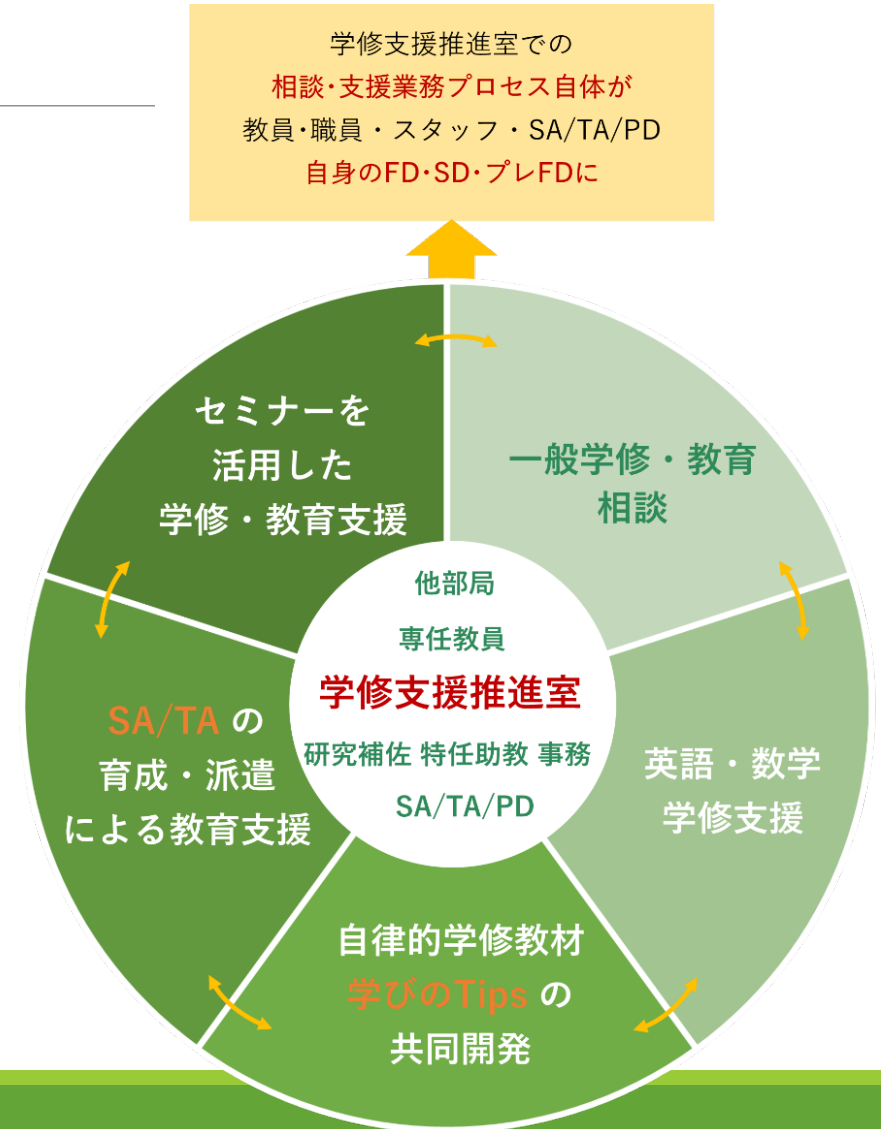
- 理工系 女子学生4人（2年生2人、3年生2人）
- 調査結果を説明→感想等を言ってもらう。 大阪市立大学での学習を振り返っての評価 （良かったこと、改善した方がよいことetc.）
- 回答の一部
 - 進学／就職への意識はそんな感じ。社会に出るのが2年遅くなることは大きい（親etc.から言われることも含む）
 - 卒業後を考える機会や、上級生・院生との多様な交流が欲しい。1年生の時にあったようにも思うが、1年生は何も考えていない…。3年生が院生の研究を手伝えると良いのでは？
 - 就職に関する情報が得にくいと感じる（低学年）
 - LCで4年生・院生と1-2年生が研究のことなど話せると良い。1-2年生は単位を取るので（気持ち）一杯。

間接評価：仮説生成・対話支援・FD支援 ツールとしての 学生調査、教員調査etc.



OCUラーニングセンター(LC)／学修支援推進室の構成と活動内容

室副室	長長員	副学長〈教育・学生担当〉(兼理事) 大学教育研究センター教授 特命副学長〈教育改革担当〉 専任教員 特任教員〈LC担当〉 研究補佐
事務局		大学運営本部 学務企画課
連携メンバー		英語教育開発センター特任教員(英語担当) 数学相談所 研究員(数学担当)
学生メンバー		TA(ティーチング・アシスタント)大学院生 SA(スチューデント・アシスタント)学部学生



OCUラーニングセンターで活動するSA, TA

イベントの
実施を例と
して

企画の具体化

1. 主担当のSAによる提案
2. TAが経験をふまえコメント・修正
3. LCスタッフによるコメント(会議)

実施・運営

1. SAが中心となって進行
2. TAがSAをサポート
3. LCスタッフが参加し、リハーサルの実施

企画

(イベント・Tips・活動計画等)

1. SAによる提案
2. SA・TA・特任教員で検討
3. 実施スケジュールの確定

振り返り

1. 個人で振り返り
2. SA・TA・特任教員での振り返り
3. LCスタッフ全員で共有(一部はニュースレター等で情報発信)

次の企画へ

SA, TAのLCでの活動を通して ——SA, TAによる振り返りから

機会

- 定期的な振り返り(イベント終了後や雇用期間終了時に実施)
 - 「SA/TAの業務内容に関する調査」(雇用期間終了時に実施)
-
- 学年が上の方と一緒に企画を進めることができたのはよかった。議論をしているときに聞いたTAの人の意見は、自分からは出ないものだったので。(SA)
 - イベント当日では自分から話す機会が多かったのですが、TAの方に助けてもらわなければ收拾がつかなくなっていたと思います。もっと話しながら、その場の状況に応じて適切な判断を行うスキルを向上させたいと思いました。人前で話せる機会になったという点ですごく充実できたと思います。TAのみなさんの綿密な準備がなければ成り立たなかったと思っています。(SA)
 - OCUラーニングセンターのイベントに本格的にかかわるのも初めてであったが、企画から運営まで時間をかけて作り上げていくことができ、やりがいを感じた。しかし、今回はそれぞれが自分の割り当てられた仕事に邁進していた感じがあったので、次回以降のイベントでは、もっとTA・SA間との連携強化をしたい。また、強化できるように自分から動いていきたい。(SA)
 - 大学において、学生視点だけでなく、職員の方や教員の方とかかわることで視点が広がり、考え方に深みが増した。(SA)
 - 業務の遂行において、自由度が高く、ある程度裁量が任されているのがよい。しかし、LCのスタッフ(教員)も含めた役割分担の調整は難しい。(TA)